

《書評》

那須敬著

『イギリス革命と変容する〈宗教〉——異端論争の政治文化史——』

米倉 美咲

評者の専門は「17世紀イングランド」ではなく「16世紀フランス」であり、したがって、「イギリス革命」については門外漢である。しかしながら、イギリス革命を「宗教改革戦争」と捉えることを目指す著者と、フランス宗教改革を専門とする評者との間には、広く「宗教改革」を議論する場が共有されていると言えるだろう。評者が本書を紹介しようとする動機もここにある。というのも、本書の問題意識ならびに検討手法は、その時代や地域を超える示唆に富んでいるのである。

本書の意義については後述することとし、まずは本書の構成と内容を紹介したい。著者の那須敬氏は近世イングランドの宗教文化史を専門としており、氏の博士論文と博士課程修了後に発表した論考とが、本書の土台になっている。本書は次のような構成である。

序章

第1章 イングランド議会と反教権主義

第2章 革命期イングランドのオルガン破壊

第3章 失われた宗教統一 ——イングランド議会とスコットランド教会

第4章 異端の政治学 ——『ガングリーナ』と魂の医師たち

第5章 異端をカタログする ——『異端目録』と宗教複数主義

第6章 宗教を再定義する ——『世界宗教大全』の時代

あとがき／図表一覧／略年表／用語集／索引

内容の紹介に移ろう。

序章では、本書における問題の所在、研究の方法とその意義が述べられる。17世紀イギリスにおける革命と宗教は長らく、ホイッグ史観に支えられた「ピューリタン革命」論として扱われてきた。これは、「アングリカニズム」と「ピューリタニズム」の対立を国王と議会の対立に重ね合わせ、後者の勝利たる「革命」を肯定的に評価する歴史観である。もちろん、この進歩史観的な「ピューリタン革命」論は近年相対化が進んでおり、研究視角の多極化や「ピューリタン」・イングランド中心史観からの脱却が図られている。「イングランド内戦」や「三王国戦争」「ブリテン革命」といった名称への変更がその証左であろう。著者はこれらの流れを踏まえて、「ピューリタン革命」の語を避け、ブリテン史全体にかかわる一連の政変を「イギリス革命」と呼ぶ。また、近世における宗教は、社会や文化そのものであったことを指摘し、この革命を「宗教とは何であるかという文化的前提を問い直す戦い」（本書5頁）であったと位置付ける。本書の主眼は、この「戦い」を通じて「宗教」

そのものの意味が変容してしまうという「パラドキシカルな転換」の過程を示すことに置かれている。研究手法としては、印刷出版物や政府・議会関連史料などのテキスト分析が中心であるが、著者はこれらの史料を「過去の出来事を再構成するための情報源」としてだけでなく、当時の「経験の構成要素」としても分析しよう（本書 13 頁）と試みる。それはつまり、その文書が当時の文脈で持ち得た影響力や緊張関係を考察することに他ならない。この点については第 4 章以降で詳しく触れることにしたい。

第 1 章においては、「アルミニウス派」と呼ばれる一部の国教会聖職者と、イングランド議会との対立の事例を通して、国教会・王権・議会の関係が再考される。17 世紀はじめまで、国教会の主流派や大学の神学教育がカルヴァン主義のコンセンサスの中にあっただのに対して、アルミニウス派はこのようなカルヴァン主義の伝統から離れて、国王保護下での新たな国教会文化を形成しようとした。彼らの特徴としては、儀式至上主義、歴史修正主義、教権主義が挙げることが出来る（前者二点に関しては、それぞれ第 2 章と第 5 章で触れられる）。聖職者の権能を神聖視し、俗人の管轄から明確に区別しようとする（教権主義）アルミニウス派は王権と結びつくことによって、徐々にその勢力を拡大していった。アルミニウス派と議会は、互いに相手を「異端」だと非難したため、ここに、「異端」を裁く主体が、聖職者であるのかそれとも議会であるのかという問題が浮上する。この時、議会が議会制定法を用いて、アルミニウス派を「王権軽視罪」違反で取り締まろうとしたことが重要である。国王の至上権を、教会権に優越する世俗権力として捉える議会にとって、教権主義を掲げるアルミニウス派は、「国王による国教会統治を阻害すると思われる聖職者」だったのだ。アルミニウス派と議会のこのような対立は結果的に、至上権の担い手としての自覚を議会に促し、反教権主義をイングランドに根付かせることとなった。長期議会による国教会改革とは、教会と聖職者を再び世俗権力の管理下におくことだったのである。

第 2 章の叙述の中心は、17 世紀イングランドにおける音楽である。17 世紀半ば、イングランド中に吹き荒れたオルガン破壊の嵐は、長らく「音楽史の空白」や「ピューリタニズムに内在する芸術不信の結果」と見られてきた。本章のねらいは、これらの潮流から距離をとり、近世イングランドの政治・宗教・文化の歴史の中での音楽の位置付けを探ることである。16 世紀末までに、イングランド国教会には二つの音楽的伝統が存在していた。オルガンと聖歌隊を伴う大聖堂の礼拝音楽と、聖職者と会衆とが共に斉唱する詩篇歌である。前者は儀式至上主義を奉じるアルミニウス派によって担われ、17 世紀前半には、彼らの主導のもとでオルガンが教会に復活してゆく。しかしその様は、詩篇歌を重んじるカルヴァン主義にとって、制御を失った不健全な教会体制の象徴と映った。1643 年議会が国教会の改革に取り組み始めると、その一環としてのオルガン破壊が進行した。オルガン破壊は儀式至上主義に対する制裁だったのである。しかしながら、両者が「音楽そのものの有益性」に立脚して論を展開していたことには留意すべきであろう。つまり彼らは、音楽の有益性を認めた上で、その用い方を巡って対立していたのだ。したがって、オルガン破壊は反音楽を意味していなかったのであり、そこには、現代の我々がもつ無害な音楽像とは異なる

心性が存在しているのである。

第3章では、スコットランドとイングランドの宗教統一の試みという視角から、イギリス革命が捉え直される。主教制を維持したイングランドに対して、スコットランドでは16世紀末までに長老制が確立されていた。しかし、ジェイムズ1世とチャールズ1世の治世下で、スコットランド教会の「イングランド化」が進行したため、反発を強めたスコットランド契約派は、長老制を共通軸としたイングランドとの宗教統一を目指すこととなる。1643年に締結された「厳粛な同盟と契約」はその結果であり、この調印以降、ウェストミンスター神学会議を舞台に、具体的施策が検討された。しかしながら、第1章で見た通り、イングランド議会は国教会に対する世俗権力の優越を掲げており（エラストス主義）、教会統治は「神権」に属するため世俗権力の介入は避けるべきだというスコットランド契約派との対立は避け難かった。この対立は、「厳粛な同盟と契約」第1項の、教会における陪餐停止権の所在をめぐる議論を難航させ、最終的に契約派は妥協を余儀なくされた。続く第2項の異端の弾圧をめぐる問題は、宗教統一の必要条件という位置付けを与えられ、これに関しては、長老派と議会とが連携することが出来た。しかし、独立派の存在感が増すにつれて、弾圧の対象たる「異端」の定義すら曖昧なまま、宗教統一の構想は放置されてしまうのである。

第4章と第5章の主役は、この「厳粛な同盟と契約」第2項において問題となっていた「異端」である。しかしながら著者が注目するのは、異端の様態そのものではなく、概念としての「異端」を構築した固有のコンテクストである。17世紀前半まで、「異端」は「教皇主義」の属性を表す語であり、宗教改革を機に登場した分派に対しては殆ど用いられてこなかった。だが、第3章で言及されたように、1640年代半ばには、弾圧の対象とすべき「異端」そのものが議論的となっていたのである。神学会議の中で、議会のエラストス主義を頼みとすることが出来た独立派も、出版と言論の世界においては、長老派に対立する「異端者」と位置付けられた。トマス・エドワーズが著した『ガングリーナ』は、長老派と独立派の対立を「正統」と「異端」の闘いとして描いた顕著な例である。エドワーズは病のメタファーを用いて「異端」の脅威を訴えたが、このような表象は、独立派やセクトの個々の主張の是非を棚上げにし、「異端」の一般的な性質を論ずることを可能にした。加えて、病たる「異端」という表象は、その治療者たる長老派聖職者が、「異端」を取り締まることをも正当化した。つまり、その定義が曖昧なものであれ、否、むしろ定義が曖昧であればこそ、「異端」を問題化することで運動の一貫性を見出すことの出来た神学会議や議会に対して、エドワーズは、独立派と長老派の対立を「異端」と「正統」になぞらえることで、このような二項対立を創造したのである。

次の第5章では、「カタログ」という形式をとる印刷出版物に注目して「異端」が論じられる。分析の対象とされるのは、イフライム・パジットの『クリスチャン目録』と『異端目録』である。前者においてパジットは、教会史を歴史的・地理的な広がりの中で捉えることにより、カトリック側を少数派として描こうとした。この背景には、ローマ・カトリ

ックと国教会擁護派の間で行われていた「真の教会の継承」をめぐる論争がある。イングランド国教会は、その歴史的正当性を証明するために、カトリック教会の外部に存在する真の教会の歴史に自らを位置付ける必要があった。それ故パジットは、キリスト教世界の多様性を受け入れ、かつそこに共通性を求めながら、一方でそこからローマ教会を排除し、国教会を擁護することを試みたのである。パジットは中でも東方教会を高く評価したが、これは、反ローマ・カトリックの立場をとりつつもカルヴァン派プロテスタントを迂回する教会史の枠組みとして、歴史修正主義の志向をもつアルミニウス派聖職者たちに領有されることとなった。『異端目録』においてもパジットは、数々の宗教集団（異端）を収集・分類・列挙するという「カタログ」形式を採用している。宗教の単一性がその正統性を担保していた当時、カタログが網羅的であればあるほど、すなわち、宗教的誤謬の増加と多様性が強調されればされるほど、セクトの誤りは証明され、カタログの信頼性は高められた。しかしながらその一方で、カタログのこのような構造と形式とは、唯一であったはずの宗教が解体されるという、新たな展開をもその内に秘めていたのである。

「異端のカタログ」に続いて、第 6 章では宗教のカタログとも言えるアレクサンダー・ロスの『世界宗教大全』が検討される。ロスの活動の背景として著者は、一見矛盾する二つの要素に注目する。すなわち、非正統とされる宗教的知識の流布が強く警戒されていたこと、そして、多様な宗教カテゴリーに対する知識欲が高まっており、伝統的な宗教理解の相対化が促されていたことである。あらゆるキリスト教の諸宗派、さらには世界の諸宗教について、ロスは網羅的に叙述していったのだが、そのことは、個別宗教の多様性を認め、かつ、それらを包摂する上位概念としての「宗教」を新たに定義することとなった。従来の異端学が、特定のプロテスタント神学の正統性を証明するために他の教派をカタログ化したのに対して、ロスは、抽象的な「宗教」の必要性を証明し無神論を糾弾するために、個別の宗教をリストへ収めたのである。本章の後半では、このような革命期の異端学と王政復古期の保守的な宗教言説との間の、連続性と断絶とが考察される。連続性として著者が挙げるのは、「セクトを国家と教会の秩序に対する脅威とみなす認識」（本書 212 頁）である。プロテスタント非国教徒に対する敵意は、王政復古期の特徴であった。しかしながら、1640 年代に「異端」が撲滅の対象であったのに対して、王政復古期において脅威と認識されたのは「無神論」であった。著者は革命期との断絶をここに見出す。1650 年代以降、「無神論」に対抗するため、「理性」にもとづいてキリスト教信仰を証明したり、人類に普遍的な「自然宗教」を探究したりすることが試みられた。ロスの活動はこの一環として位置付けられ、したがって、革命期に生じた異端学の目的は、セクト批判から無神論に対する「宗教」の擁護へと移行していったのである。

本書は、内戦や革命の文脈で 17 世紀イングランドの宗教的論争を取り上げ、その過程で宗教そのものがどのように変容していくのかを論じた。論争の対象が何であれ、議論に加わった者たちが「国家と社会の全体を包括する統一秩序としての宗教の護持を目標にしていた点において、イギリス革命は宗教改革戦争と呼ぶうる出来事であった」（本書 226 頁）

と述べて、著者は筆を擱いている。以上で見てきたように、音楽やカタログといった文化・社会史的側面からイギリス革命を再検討したことに、本書の独自性は存すると言えるだろう。また、「異端」に抗して「正統」を擁護する論争が、結果として「宗教」そのものの変容をもたらしてしまうという「パラドキシカルな転換」の論証も、鮮やかに展開されている。しかし、異なる地域・時代の宗教改革を扱う者の目からすると、いくつかの疑問が残ることも事実である。本書の意義をより明確にし、今後の展望につなげるために、以下では本書の課題を二点に絞って論じたい。

一つ目は、「ピューリタン」という用語についてである。この語はイギリス史に特有であり、かつ、論争性を孕んでいるため、専門外の者にとっては把握しづらい言葉である。例えば、本書 26 頁に登場する「ピューリタン」は、国教会に対して批判的なカルヴァン派の非国教信徒のことを指しているのに対して、102 頁では教区民に聖餐式を施す「ピューリタン」聖職者が現れる。後者の「ピューリタン」とは、「カルヴァン主義の傾向が強い国教会派」の聖職者を意味しているのであろう。以上の 2 例からだけでも、果たして「ピューリタン」とはいかなる人々のことを指すのか、という疑問が浮上してくる。これを考える上で、この単語を、「国教会のさらなる改革に期待しつつ敬虔な信仰生活に努める人々や、そうした文化的傾向を指すことば」（本書 8 頁）として著者が定義していることは示唆的である。というのも、著者は、「ピューリタン革命」史観を相対化し、「アングリカン」と「ピューリタン」という誤った対立構造を回避するためにこのような定義を行ったのであるが、確かにこれは、従来二項対立のもとに置かれてきた国教会派とカルヴァン派の両方を、その内に含み得るからだ。ところが、カルヴァン派と対立したアルミニウス派であっても、教会の「さらなる改革」を志向し、自らの活動をして「敬虔な信仰生活」を自認していたことは確かであり、この意味で彼らを「ピューリタン」に含めることもまた、著者の定義上、可能となってしまうのではあるまいか。上に挙げた例のように、本書の中で実際に用いられる「ピューリタン」という語は時に曖昧である印象を受けたが、「ピューリタン」のこのような可能性と伸縮性は、二つ目の課題、すなわち「異端」の複数性という問題とも関わってくる。

本書後半の主題は、「異端」が創造され、その複数性がカタログによって確立され、「宗教」の相対化が導かれたことであつた。しかしながら、そもそもなぜ、「異端」の複数性を利用することによって「正統」を擁護するという形式を、彼らは採用し得たのであろうか。つまり、「異端」内部の多様性が認識されていたこと自体が特殊な現象だと言えるのではないだろうか。というのも、評者が専門とする 16 世紀前半のフランスにおいて、異端は何よりも「非正統」を意味しており、それ故、「正統」たるカトリックから「異端」とみなされた人々は、個々の思想や行動がいかなるものであれ、「ルター派」と位置付けられたからである。すなわち、「ルター派」は「非正統」であるため、「異端」たる者はすなわち「ルター派」であると判じ得たのだ。そこでは「異端」内部の多様性やその複数性にもとづく分類への道は閉ざされている。なぜなら、異端はまさしく異端であり、個々の差異は重要で

はないからである。そして、この論理を支えていたのは、カトリックという唯一絶対の「正統」の存在であっただろう。つまり、「正統」の単一性と無謬性が信じられていたからこそ、「異端」の複数性は見出されることがなかったのである。これに対して 16～17 世紀のイングランドでは、本書 133～134 頁で著者が整理しているように、「異端」の意味がその時々によって変化していた。国教会が設立されるまでは「ルター派」が「異端」として攻撃されていたが、その後の立場逆転に伴って、「教皇主義」が「異端」と位置付けられた。1640 年代の半ばになってから、諸セクトが「異端者」と呼ばれるようになったことは第 4 章で確認された通りである。つまり、16～17 世紀イングランドにおける「異端」という語はそもそもこのような可変性を伴っており、それが「異端」それ自身の多様性を是認したのではないだろうか。さらに言うならば、17 世紀イングランドで「異端」を分類・列挙することが可能だったのは、「正統」たるイングランド国教会の存在自体が、既にカトリックという一つの「正統」からの転換であつたからではないだろうか。すなわち、イギリス宗教改革においては、「正統」と「異端」が常に明確な二項対立状態に置かれていたのではなく、その可変性と複数性が常に含意されていたのではなかろうか。ルター派を「異端」と断じたのはカトリック教会であり、ヘンリ 8 世は教会の守護者たることを自認することによって、「ルター派異端」を非難する言説を生み出した。「教皇主義者」を「異端」と批判することは、国教会が自らの正統性を主張することと表裏一体となっていた。異端学者たちが「異端」を列挙したのも、それが「正統」たる自己を確立する手段であつたからだ。このように、「異端」の変遷はその対となる「正統」の転換を映し出しており、しかもそれは、イギリス特有の現象だったのである。しかしながら、「正統」と「異端」が共に可変性を有し、相対化し得る概念であるとするならば、「異端」とされた人々が、「正統」を自認する人々をどう捉えていたのかも、分析の対象となるのではないだろうか。具体的には、「異端のカatalog」で分類対象となったセクトの反応や抵抗である。彼らは異端学者たちを「異端」だと非難したのだろうか。それとも、もはや自らが「異端」であることを認めるに至っていたのだろうか。「異端」とされた人々の言説がより明らかになれば、宗教改革史を貫く「正統」と「異端」の二項対立そのものへの問い直しに繋がるのではなかろうか。

さて、評者なりの疑問点を指摘してきたが、著者の意図を十分に汲み取れていないのではないか、誤読を重ねているのではないかと危惧している。だが、異端学書を数量的・形式的に分析する手法や、文化・社会史的視点から事件や登場人物たちに注目し、イギリス革命を「宗教改革戦争」として描き出す論展開は、評者自身、非常に刺激を受けた。第 4 章で採用されていた、「異端」という語をタイトルに含む出版物の数を経年的に追う方法は、「異端」をめぐる議論が 1640 年代の特殊なものであつたことを示し、「異端」が人為的に構築された現象であることを補完的に説明していた。カatalogという書物の形式が、人々の「異端」観・「宗教」観を規定していったことは、第 5 章と第 6 章で論じられた通りである。書物という史料を複数の側面から分析することの有意義性をも、本書は教えてくれて

いる。また、イギリス革命を「ピューリタン革命」としてではなく、「宗教改革戦争」として捉え直す本書の試みは、「長い宗教改革」にも一石を投じることになるだろう。第6章の後半で言及されていたように、この「宗教改革戦争」の過程で生み出された「宗教」の複数性は、名誉革命(1689)によって決定的となる。つまり、「イギリス宗教改革」は16~17世紀を通じて、イギリスの「宗教」のあり方を変容させ、形作っていったのである。

多くの人によって本書が読まれることを切に願う。

(A5判 9+239頁 2019年3月 岩波書店 税別5600円)

(京都大学大学院修士課程)